

令和 6 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 5) 地域への文化発信の拠点となる取り組み

申請組織 外国語学部

申請組織長 役職名 学部長 氏名 藤岡阿由未

統括責任者 役職名 教授 氏名 堀田あけみ

課題名 現代日本ポップカルチャーに関するイベント・研究企画への取り組み

	役 割	氏 名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	堀田あけみ	外国語学部 教授	冊子作成
		広瀬正浩	教育学部 教授	冊子作成

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

表現文化学科では昨年度までは学部誌「言語と表現」を刊行し、一昨年度までは独自の文学賞を運営し、受賞作を文庫化し、無料配布してきた。編集・デザイン・印刷会社との交渉新学部になり国際教養学科においても同様の「本作り」をしていきたいと考えた。現代日本を支えるポップカルチャーを考えると本作りは大きな意味を持つ。近年活発化している同人誌の、『zine (ジン)』と呼ばれる新たな媒体の流行を取り入れ、国際教養学科の広報の一部を担う役割を果たせる本を作ることを目的とした。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

冊子作成のメンバーを募るため、9 月上旬にジャーナルを用い全学部の学生を対象とした編集部員の募集を行った。メインとなる学生は後期「社会関与プロジェクト D」の受講生である。授業中に講義内容に合わせて企画を進行させた。現代の若者文化を反映させた内容にすることを指示した。授業を受けていない学生は記事のみを書くライター、印刷会社との交渉役を務めた。3 つのグループがそれぞれ「平成女兒カルチャー」「女子に刺さるミュージック」「お酒とうまく付き合う本」をテーマとした。お酒の本は、他のプロジェクト・相山ピーチクラフトビール・ワインと連動した。1 月末に印刷会社に入稿した。いずれも、女子大学生が日常の中で思うことをテーマにしている。また、ともすると無料配布本なのでと軽視されがちな著作権にも配慮し、ネットからの「拾い画像」を使用しないことを徹底した。

3. 事業の成果（600字～800字程度で記述）

3種の成果物を作成することができた。①「平成女兒カルチャー」は現在の大学生が小学生だった頃に好きだったものを紹介し、なぜ流行したかを分析したもので、装丁は当時の少女向け雑誌を意識したもの、小さめの製本で読みたいと思った人がバッグに入れて持ち帰りやすいようになっている。②「女子に刺さる MUSIC」は授業内で話し合いが進まず、一度、「作らない」方向を示したが、やっぱり作りたいということで、A3両面を二つ折りにした4頁の構成とした。元は①と似た作りを目指したが、動き出したのが①の完成原稿ができてからということで、簡単なパンフレット形式にした。②を制作するグループには、途中で離脱して①の原稿の手伝いをしていた学生もいたが、最終的には全員が参加して作成している。しかし、おすすめのプレイリストと理由を挙げただけ、という深みがない内容になってしまった。③「Cheers!!」ワイン・ビールのプロジェクトと連動した女性のためのお酒の楽しみ方の本。女子大学生を対象として想定しているので、未成年も含まれることから、これからお酒を楽しむ人に向けた構成を意識した。また、堀田ゼミとも連携し、お酒をテーマにしたショートストーリーを、実用的な記事と共に掲載している。裏表紙に椋山タータンを使用する、外国語学部のイメージカラーである青を差し色として使用する等、装丁にも細かい工夫がなされている。計32ページの作品になった。

これらは、オープンキャンパス等の広報行事で配布するとともに、それぞれが置いてくれる場所（店頭・駅等）を開発し、広く読んでもらえる工夫をする。

4. キーワード（本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載）

①ポップカルチャー	②出版文化	③編集	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

新学部の新しい企画として、手探りで始めたため課題は多い。まず、予算の配分がうまくいかず、個人研究費からの持ち出しとなった。これは、②のグループにデザインをできる人間がおらず、やむをえず印刷会社への発注となったことが大きい。「作れなかった事実も経験のうち」と伝えたが、どうしても作りたい、と言われて情に絆された結果であるが、これは「できないのだから作らない」とした方が良かったのではないと思う。他学部他大学開放科目であったため、学科や学年が偏らないよう、事前にグループを分けた結果、期せずして②のグループに積極性に欠ける学生が集まってしまった。授業中に作業ばかりでも困ると思い、記事を書いたりラフを描いたりを宿題としたが、それをいつもやってこない学生がいた。もっと、授業中のレクチャーを省略し、作業を授業中に進める必要があるのかもしれない。かつての「言語と表現」の編集のように、学生に任せておけば、どんどん進むというのは幻想で、今の学生は「何を」「どのように」「どれくらいの時間で」するのかを明示しないと、いけないのだと痛感した。しかし、通常の課題の出来や授業態度が著しくよろしくない学生も、記事を書く、最終レポートを書くことはちゃんとしていた点は、この授業をした甲斐があったというものだと思う。